

にいかした

# 北から南から

と

## 父の像

霜野好克

父の死を、私は新潟の下宿先で知らされた。一九六三年二月二十六日夜半、それは全く突然のことであった。享年六十四の若さである。

死因は狭心症。父の酒好きは、はっきりと覚えている。酒の肴は、イカのはらわたを醤油で煮たもの。そして酒は自家製。白濁した酒は、時間の経過と共に強い酸味を帯びるので、父は白い重曹をコップの中へばらばらと散らし、毎晩美味しそうに飲んでいた。

他界した二月二十六日は、寒の戻りが激しく、実家の黒部は厳寒の日であったという。家から三十分位の共同水車小屋で薬打ちを終えた父は「少し疲れた」と言って、そのまま

床につき、静かに他界したそうである。

小さい頃の父の印象と言えば、酒好きの他は「おっかない」「働き者」「信心深い」「日記を付ける」「新聞をよく読む」「余り喋らない」等である。

万年筆でノートにびっしりとその日のことを書いていた日記。毎日の農作業や学校のことで……植物の図をちらっと見た記憶もある。

夕食前、仏壇の間で父の後ろに正座させられ、父の読経をじっと聞かされ続けた私。

そんな父が私に与えた仕事。

「田植え」「畦豆植え」「草刈り」「山羊の乳しぼり」「堆肥運び」「杉の木の下草刈り」「粟にゅう編み」「薪割り」「稲投げ」（はさがけ）「粃すり」「庭の除草」「水きり」（田の排水のための溝ほり）「縄ない」等々であった。これ等は、高校卒業まで続いた。

さしもの厳しい父も高校三年頃になると、気力も衰えたのか、私が一人前になって安堵したからなのか、父親らしい姿をひそめてしまった。私の手元に父からの手紙が四通残っている。

自分の父を褒めるのもおもはゆいが、神社の  
のぼりを書いたほどのこともあり、なかなか  
の達筆である。

四月も今日で終り、いよいよ五月新緑  
の季節となります。よい天気が続いてい  
るのは、そちらも同様でしょう。お蔭で  
仕事も大変はかどり昨日で畦塗りも終っ  
て、大豆植えは沼田のみ残っています。

母も私も身体の調子は思ったよりよい  
ので喜んでおります。扱て、教生の仕事  
も大変だとの事、殊に研究授業には相当  
熱が入っている由、しっかりやって下さ  
い。上手な批評ができるようになったら  
しめたものです。

本日、金一万一千円送付しました。大  
事に使ってください。(中略)

三日、五日の休みに帰ることができま  
せんか。伸郎(弟)は、其後如何にして  
いるのかいくら便りをして返事があり  
ません。どうしているのか心配している

と一度便りをやってください。

球根(チューリップ)は、今真盛りで  
す。では、くれぐれもからだに留意して  
懸命に勉めて下さい。

四月三十日 宛

父より

父も母も寮や大学には一度も足を運んだこ  
とはなかった。東京への弟の就職さえも親代  
わりとして、学生であった私に任せていたの  
である。

今にして思えば、私を信頼していたという  
より、多忙であった生活がそうさせていたの  
であらうか。

父の年に近付くのもそう遠くはない。父か  
らの手紙を大事にとっておきたいと思う。

※父からの手紙の( )は筆者による説明。

※父からの手紙の末行、四月三十日宛の「宛」は、  
四月三十日父から私(筆者)へ「宛」と「名」ぞ  
した」意であらう。

(しものよしかつ＝能生町磯部小学校)